

中国のほんの話(17)
中国現代文学館(北京)

蔭山 達弥

夏期語学研修の引率で五年ぶりに北京にやって来た私には一つの宿願があった。それは2000年5月に開館したばかりの中国現代文学館を訪れることであった。滞在先である北京第二外国语学院に到着すると、1990年、91年の二年間、京都外大で教えられ、私が北京に来る度にお世話になっている北京師範大学教授李岫先生宅に電話をかけた。ところが、何度かけても「この番号は現在使用されていない」というアナウンスが流れるのみ。仕方なく、同じ北京師範大学から京都外大に連れて二年目の鄒紅先生の京都のお宅に、北京から国際電話をかけ、やっとのことで、その日の夜、李岫先生と連絡が取れた。李岫先生は五年ぶりの私の声を聞くと、大層喜んでくださり、日を改めて先生のお宅を訪問することになった。その後、しばらくして思いがけない電話が自宅にかかってきた。五年前、北京で開かれた学会に参加した時、深く知りあうようになった友人・宋懷冰氏からであった。なんと李岫先生が私が北京に来たことを氏に知らせてくれたのである。物事は一つうまく行くと、次から次へと幸運が重なるもので、宋懷冰氏が仕事されている現代作家・茅盾の故居を訪れた際、氏から旧知の呉福輝氏(中国現代文学館副館長)に連絡をとってくださり、待望の中国現代文学館見学が実現することになった。

中国現代文学館は北京市東北の芍薬居に位置し真新しい新館の南門には山東省萊州から運ばれてきた50トンもある巨石が屏風のように立っている。石の両側には作家・巴金の言葉が刻まれている。正面には「私たちはなんと豊富な文学の宝庫であろう。すなわち多くの作家が残してくれた傑作である。それらは私たちを支え、教育し、励ましてくれる。自身をもっと善良に、もっと清らかに、他人に対してもっと役立つようにしてくれる。」という言葉が刻まれていて、見学者を迎え

てくれる。正面の回転扉の取っ手は巴金の手形である。中に入り、振り返ると左右両側の大型のステンドグラスに目を奪われる。それぞれ長さ14メートル、高さ3.6メートル、全部で2万4千枚の50色のガラスがはめ込まれている。そこに描かれているのは魯迅、郭沫若、茅盾、巴金、老舍、そして曹禺の代表作に描かれている人物である。



呉福輝副館長(左)と筆者

受付で訪れた旨を告げると、呉副館長は二階の応接室で出迎えてくれた。応接室には中国現代文学館の模型が飾られていて、それを見ながら説明して下さった。呉氏の説明では文学館はまだ一期工事が終わった段階で、これから二期工事に入る予定だということであった。館内は高級技師の李熙氏に案内して頂いた。一階展示室に向う左側の壁には「中国現代文学名著の中の罹災者」、右側の壁には「中国現代文学名著の中の反抗者」の巨大な油絵が描かれている。一階展示室には魯迅、郭沫若、茅盾、巴金、老舍、曹禺、そして唯一の女性・冰心の創作と生活環境が再現されている。二階は百年の現代文学を回顧し、代表作と、作家集団が集中して展示されている。三階は51人の作家の個人蔵書及び18人の作家の書齋が再現されている。李氏の説明で一番印象に残っているのは中国現代文学館のシンボルマーク「ㄥ」(読点)の説明である。「中国の古典文学では読点は使わない。読点は現代を代表する。読点は終りが無いことをあらわすから、ずっと今日まで続けていることを示す。」ふだんなにげなく使っている読点にこんな深い意味があるなんて、目を見開かれる思いがした。李氏は懇切丁寧に閉館間際まで説明して下さった。応接室に戻ると、呉副館長から署名入りの著書を頂き、ステンドグラスの前で記念撮影(写真)し、文学館を後にした。

かげやま たつや(助教授・中国文学)